

Title	ポスト・ユートピアのキューバ： 非常な日常の民族誌的研究
Author(s)	田沼, 幸子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/47183">https://hdl.handle.net/11094/47183</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏 名 田 沼 幸 子

博士の専攻分野の名称 博士（人間科学）

学位記番号 第 20815 号

学位授与年月日 平成 19 年 3 月 23 日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

人間科学研究科人間学専攻

学位論文名 ポスト・ユートピアのキューバ：非常な日常の民族誌

論文審査委員 (主査)

教授 中川 敏

(副査)

教授 小泉 潤二 教授 春日 直樹 教授 栗本 英世

#### 論文内容の要旨

本論では、ソ連・東欧の崩壊にともなって始まった「平和時の非常期間」という経済危機と、その政策によって一概に革命への信頼を失ったとされる人びとが、革命に対するアイロニカルな物言いをすることによって、全肯定か全否定かの二者択一を避けた複雑な態度をとっていることを示す。

キューバでは、1990 年から、「平和時の非常期間」(Período Especial en Tiempo de Paz : Special Period in Times of Peace) と呼ばれる経済危機が始まった。東欧諸国が次々と「自由化」するのに続いて、キューバも直に、市場化と民主化をたどるだろうと局外では予想されていた。ところが、「非常」と名付けられた日常は、筆者が調査を行った 1999 年 6 月から 2004 年 4 月の間 (26 ヶ月間) にも、続いており、留保付きの「社会主義」は続いていたのである。

非常期間には、それまで革命によって「異常」の範疇に選り分けられてきたものが、経済危機を打開するために、キューバ社会に再導入された。搾取と貨幣なき共産主義を目指す倫理のために、敵視され、犯罪と同一視されていた存在が、合法化されたのである。革命後は、肉体的に「働く」(trabajar) ことのできる者はすべて労働に参加すべきであるとされ、この範疇にないと見なされた、商売 (negocio) や怠惰 (vagancia) は犯罪とされていた。ところが、非常期間は、このルールを転換させた。1) 外国人観光客と外国企業の誘致、2) キューバ国民による外貨 (ドル) 所持と使用の合法化、3) 小規模な自営業の認可、といった法令によって、それまで周縁化されていた人びとが、かつては「非合法」だった方法によってドルを手に入れて豊かな生活を享受するようになった。一方、革命政権の理念にしたがって公務員として働いてきた専門家 (profesionales) たちは、価値の下落したキューバペソの給料で厳しい生活を強いられるようになったのである。従来の非常期間の研究では、この結果、専門家たちは、革命に「幻滅」したと、一枚岩的に報告されてきた。しかし、本論では、キューバに住む人々の非常期間と革命への見方がより複雑なものであることを示す。

まず、革命を指導したカストロやゲバラの演説と、彼らの経済政策とその変遷を検討し、どのように「革命的」(revolucionario) なものとそうでないもの、つまり、革命における「ふつう」と「異常」が生成されてきたのかを紹介する。理念では、キューバの未来の「物質」的發展の実現は、現在の物質的報酬を求めない自己犠牲的「精神」に基づく労働であるべきだとされてきた。ただし、基軸となるこの方針は、そのときの政治経済状況によって修正さ

れ、相反する方針とメッセージが伝えられてきた。非常期間には、この二重性が顕在化し、指導者の言葉と政策は、明確にダブルバインド（ペイトソン）の徴候を示すようになる。この政策の矛盾を早くから見抜き、物質的報酬を求めてきたのが、非合法的な経済活動に従事してきた「ヒネテロ/ラ」たち（jineteros/as）である。一方、専門家たちは、革命理念に統合され、矛盾に気づくのが遅かった自分たちの置かれた状況をアイロニカルに語る。これは、一見すると、ある無知な状態から、別の啓蒙された状態への移行を表しているようである。しかし、彼らの生活に密着して分析すると、彼らの言明はそれほど単純なものではないことが分かる。彼らは、革命の理念を信じていた自分を信じられなくなった結果、いまそれを信じられない自分も信じられない、という、懐疑的な態度を、アイロニカルな冗談によって語ることによって、自分がダブルバインドにあることを示す。冗談として語ることによって、革命を批判しつつも、もう一方の極（つまり、米国政府と在米キューバ人が主張する「自由民主主義」と「市場」のイデオロギー）にとりこまれることを避けている。彼らのアイロニーは、革命家と革命の理念を言葉のうえで笑い飛ばしながら、言外では、それらへの畏敬の念が半ば存続することを可能にしているのである。

### 論文審査の結果の要旨

本研究は、1990年から10年以上にわたって続くキューバの「非常期間」、すでに「日常」と化してしまった「非常期間」の民族誌である。その「非常の日常」を、申請者は「ポストユートピア」という言葉でとらえようとしている。「ポストユートピア」は在米キューバ系の研究者、ベハー由来の概念である。「ポストモダン」のシニシズムでは捉えきれないキューバの今の現象を捉えようとするものである。

実地調査は、1999年6月から2004年4月までの（まさに「非常期間」のまっただ中の）26ヶ月間にわたって続けられた。

申請者は、第1章でこれまでのキューバ研究を辿る。彼女は、そこに（ペイトソンの非難する）社会工学的なもの（革命に賛成であれ、反対であれ）を見出し、この論文をそのようなものではない、内部の視点からのものと位置づける。続けて、この論文を通じてのキーワードとなる（ペイトソン）のダブルバインドの議論が紹介される。ダブルバインドは、統合失調症の原因の一つとしてペイトソンが主張した現象である。「愛している」という言語的メッセージを送りながら、「愛してはいない」というメタメッセージを（たとえば身体的に）送る母親がその例である。そのような母親に反駁する余地のない幼児は、かくして、ダブルバインドにかかる、というのである。

第2章は、ダブルバインドの萌芽がすでに革命直後に表われていることを示すことに費やされる。それは革命の英雄たち、カストロやゲバラ、の表象の仕方に関わるものである。彼らは神として、またときとして理想の男性として描かれる。その英雄たちが、革命の推移の中で、精神主義と物質主義の間を揺れる発言を繰り返していく様が、歴史的に描かれる。ここで焦点をあてられるのは、仕事（trabajo）の概念である。各人が進んで自己犠牲の労働（trabajo）によって革命に貢献する精神主義と、労働が相応に評価されるべきという物質主義の矛盾するメッセージを、じつは、英雄たちは「人民」に発しているのである。

第3章は、ゲバラの言うところの「小さな愛」、個人同士の愛（amor）についての章となる。母と子に代表される精神主義的な（無償の）愛と物質主義的な、すなわち利害に関わる「愛」との微妙な関係が、フィールドワークのデータ（会話のさまざまな断片）に基づいて分析される。とりわけ革命前のマチスモ的男性像が革命の公的なレベルでは（「解放」の語のもとに）否定されながらも、日常会話のレベルではまだ生きている---その状況の生むジレンマに陥ってしまう男性たちの姿がダブルバインドの語を使いながら、生き生きと描写される。

第4章「非常期間」で、それらの矛盾が一気に噴出していく様が、記述・分析される。精神主義と物質主義の蜜月、自己犠牲に基づいての労働がそれなりの生活をもたらす事態、は終わった。人々は、いままでにない方法で「非常」状況をやりくりし（resolverし）なければいけない状況になってしまったのである。かつては、革命の精神に反していると宣言された商売（negocio）が公認される。公認されただけではない。商売人の儲けは、革命の精神主義が至上のものとしていた「仕事」をしていた人の給料を大きく上まわるのである。

もちろん、この時期、革命に見切りをつけて、国外に退去する人間もいる。また、ヒネテリスモと呼ばれる（売春

まがいの) 外国人へのたかりを実行する人間も出てくる。このような人々についての先行研究は豊富である。しかし、著者が本研究で焦点をあてるのは、このような人びとではない。著者が注目するのは、〈母親の矛盾するメッセージを受けて何もできない幼児〉に比すことの出来るような人びと、革命に「統合された」人びとである。

第5章「ポストモダンのシニシズム、ポストユートピアのアイロニー」で、著者は、そのような「統合された」人びとがいかにしてダブルバインドを避けるのかを描写する。著者が注目するのは、キューバ人の小話、クエントである。革命を茶化しているかに見えるクエントの内容は、外部の観察者、たとえば何人かの人類学者の語りに似ている。ウルフのアイロニー論を引きながら、著者は次のような対比を抉りだす---これらの外部観察者の批判的な言明が、体制への批判をシニカルに表明するのに対し、クエントは、じつは、体制への(というより、「革命」への)彼女らの愛(ウルフの言葉を使えば「畏怖」)をアイロニカルに表現しているのだ、と。言ってみれば、論理階型の混同に端を発するダブルバインドに、彼女らは論理階型の混同を武器として対抗しているのである。

最後の章(第6章)で、著者は、人類学の営為自身に対する希望について触れながら、全体をまとめて、論文を終える。

本研究は、先行研究を踏まえた上で自身の問題を立て、緻密なフィールドワークに基づいて、その問題を理論的に分析した優れた論文である。

本論文は博士(人間科学)の学位にふさわしいものと判定する。